

大学が消える街

箱崎は今

◆ 5

中国で盛大に祝う春節（旧正月）の前日に当たる六日夜、同じ日本語学校に通う中国人留学生が九州大 学正門前の中華料理店「帰郷」（福岡市東区箱崎）に集った。

祖国のぬくみ味わろう

異国と見まがう雰囲気の中で、日本語と中国語が入り交じったおしゃべりの輪が広がる。「この味に触れるとほっとするの」。一年ほど前に来日し、九大受験を間近に控える顧芯僮さん(三毛)が、仲間と興じながらうれしそうにギョーザをほお張った。

約二十年前に帰国し、「帰郷」を開業した木村琴江さん(六毛)は中国残留孤児だ。人気メニューの特製ギョーザは、育った中国・東北地方で養父母が教えてくれた。ハクサイやキャベツに粉山椒を混ぜた具を、手作りの皮で包み上げる。

帰郷

「客においしい料理を出したい」と懸命な木村さんの評判を聞き付け、中は、昨年末に店を長男の英人だけでなく、日本人の学生も九大の教官も常連客になっていった。若者たちに「おばちゃん」「お母さん」と慕われ、卒業後も長く通った九大生OBもいる。

日本を愛しながらも「年配になって帰国した孤児は、若い人のようにすぐ言葉覚えられない」と沈みがちだった木村さんを救ったのは帰郷の客だった。中国人留学生も求め、寂しさを紛らすために店を訪れる。日本と中国、二つの祖国が、小さな店で交錯する。

「客においしい料理を出したい」と懸命な木村さんの評判を聞き付け、中は、昨年末に店を長男の英人だけでなく、日本人の学生も九大の教官も常連客になっていった。若者たちに「おばちゃん」「お母さん」と慕われ、卒業後も長く通った九大生OBもいる。日本を愛しながらも「年配になって帰国した孤児は、若い人のようにすぐ言葉覚えられない」と沈みがちだった木村さんを救ったのは帰郷の客だった。中国人留学生も求め、寂しさを紛らすために店を訪れる。日本と中国、二つの祖国が、小さな店で交錯する。

ら、気軽に触れ合える場所がある」。木村さんの言葉に、英雄さんがうなずく。「みんながいつでも戻っての移転後も変わらない。



春節（旧正月）の前夜に「帰郷」に集った中国人留学生たち